

超えて精力的に電子ジャーナルの交渉業務を行ってきた。その活動の一つに ICOLC（国際図書館コンソーシアム連合）会合への参加があった。幸運なことに筆者はその ICOLC 会合に参加する機会をいただいた。当時コンソーシアム業務が初めての筆者にとって、世界の大学や研究機関が電子ジャーナルの交渉のためにコンソーシアムを組んでいることが当たり前であることに衝撃を受けた。それと同時に、世界中どこでも価格高騰などの悩みはどこも同じであることも知った。その会合のレセプションで知り合ったのが、3年後にフランスで再会することになる図書館職員だった。年に数回ではあったが、メールで情報交換、近況報告をしてきた結果、今回のフランス調査を後押しする結果となった。こう考えると、ICOLC 会合出席は「1 回限りの稀有で貴重な体験」と思っていたが、それが重なり今回の調査に結びついたのは、非常に有難く、感慨深い。

もちろん、フランス調査は「知っている人がいるから」だけでは成り立たない。フランスを今回の調査に選んだのは、それなりの理由がある。

フランスは日本と比べて総人口も少なく、研究者の総数も少ない。しかし、労働力 1 万人あたりの研究者の割合で見ると、そうそう違いがない。また、フランスはアメリカ合衆国やイギリスと違い、母国語が英語以外の国である。母国語で研究している研究者もある程度いることから、日本の研究環境と似ているのではないかと考えている。一方で、フランスはここ最近電子ジャーナルのナショナル・サイトライセンスに力を入れており、フランス国内の全ての大学、研究機関が電子ジャーナルにアクセス出来る環境を整えつつある。

JUSTICE 事務局での研修中に「日本の状況はヨーロッパと似ている」という話をしばしば耳にしていたが、では実際どのように状

.....
ワークショップ：欧米の学術情報基盤（東京支部例会）報告より

フランスのコンソーシアムを 調査して

柴田 育子

はじめに

平成 26 年度国立大学図書館協会海外派遣事業で 2014 年 10 月の 1 週間、フランスのコンソーシアム活動について調査する機会をいただいた。本稿はその時の体験と調査について綴りたいと思う。

フランスに行くのだから、さぞかしフランス語が堪能なのだろう、と思われる場合もあったが、実際そうではない。だいたい力が落ちた英会話と、唯一知っていた「ボンジュール」というフランス語だけを頼りに渡仏したのである。

なぜフランスなのか

このフランス調査は、最近の仕事の縁がきっかけであることを先に触れておきたい。筆者は 2010 年 4 月から雑誌情報係に配属され、3 年間雑誌の業務に携わった。この間 2011 年 9 月から翌年 3 月までの 7 ヶ月間、NII（国立情報学研究所）実務研修生として JUSTICE（大学図書館コンソーシアム）事務局で働くことができた。JUSTICE は 2011 年 4 月に発足直後から、国公立大学の壁を

況が似ているのか、ヨーロッパ全体を把握するのは難しいにしろ、フランスではどうだろうかこの目で確かめたかったというのがフランスを選んだ理由である。

フランスでの調査

フランスでの訪問先は、フランスの大学図書館コンソーシアム Couperin (クーブラン; Consortium Unviersitaire des Publications Numeriques) と、ABES (高等教育書誌センター; Agence Bibliographique de l' Enseignement Superieur) の2つであった。その合間に、フランス国立図書館、パリ大学やモンペリエ大学図書館を幾つか見学できるように、向こうの担当者にお願ひし、調整してもらった。

Couperin は 1994 年に大学図書館コンソーシアムとして発足していたが、2013 年よりフランス国立図書館も参加し、もはや「大学」の枠を超えたコンソーシアムに成長していた。とはいえ、専任事務局員数は3人と、JUSTICE 事務局の数と変わらない。Couperin の活動を支えているのは 100 名にも及ぶフランスの図書館職員ボランティアで、出版社との交渉業務等を行っている。交渉担当者への教育は最初に2日間の集合研修を行い、その後交渉のベテランとペアになってOJTで交渉経験を積むしくみになっている。ただし、大手出版社への交渉はもう少し大人数で交渉を行っている。

Couperin が交渉を行う一方で、ABES は大学と出版社間の支払い業務をとりまとめる役割を担っている。全ての出版社に適応させているわけではないが、一部の出版社とは、「one invoice one payment」を実現させている。これは JUSTICE も発足当初から実現させたい支払方法の一つとして挙げていたが、フランスでは実現されていた。

このように Couperin と ABES は役割を分担し、フランスの電子ジャーナルの整備に寄

与しているのである。この2つの組織の連携は近年になって密になり、うまく機能しているということである。

この2つの訪問の他に、大学図書館の職員に会って話を聞いたのは、とても大きな収穫だった。率直に「現在の Couperin と ABES の活動についてどう思うか」と聞いてみたところ、「最近の両者の活動は、特に ABES は電子ジャーナル等の電子リソースにかかわってから、私達図書館員の業務が楽になって感謝している」という声がある一方、「フランス国立図書館が Couperin に加入したが、規模や目的が大きく異なる図書館が一つのコンソーシアムでうまく機能するのか疑問だ」という意見もあった。これら図書館員の意見は、立場や図書館の規模によって違いはあるだろうが、Couperin と ABES の活動でフランスの大学はさぞ嬉しいだろう、と思っていた筆者にとって、改めてフランスの研究、高等教育の世界を冷静に見つめなおすきっかけとなった。

このように Couperin、ABES、大学図書館等を訪問してフランスのコンソーシアムの現状、活動内容を俯瞰することができた。とはいえ、まだまだ知らないことも多く、これからも引き続き出来る限り調べたいと思っている。また、フランスの事例をそっくりそのまま日本に当てはめることはできないにしろ、今後の JUSTICE 運営の参考になるのではないかと考えている。

帰国後に考えたこと

フランス到着当初は、調査がうまくいくのか、英語で意思疎通ができるのか不安と疲労でくたくたであったが、帰国する頃には調査を何とか終えた達成感と、別の思いが湧いてきた。それは、もっとフランスと交流を持ち学術情報基盤整備に関して情報交換をもつことはできないか、ということである。せっかく1週間滞在してさまざまな出会いや経験を

得たのだから、この繋がりをこれからも大切に活かすことが筆者の次の使命ではないかと考え始めたのである。今後、いろいろな場面でフランス調査の報告をすることになると思うが、自分の帰国後にふと湧いた気持ちを大事にしながら、また新しいステップへ踏み出そうと思う。

最後に

まだ海外の図書館を訪問したことがない方には、是非海を渡って調査することをお勧めしたい。日本国内の図書館に目を向けるのはもちろん大切だが、グローバル化が叫ばれる大学において、世界の高等教育機関やその周辺を知ることとはとても大切だと考える。語学力が…と腰が引けてしまうかもしれないが、拙い英語でも、同じ図書館員という専門職として通じ合うことが多いのも事実である。それゆえに国を超えて同じ問題を共有し、さまざまな解決のアイデアや糸口を共に見出すことは、世界の図書館員と繋がれる第一歩になるだろうし、自分自身の世界観も広がると考える。

フランスの図書館員の方には本当に良くしていただいた。最初は「ボンジュール」しか喋れなかったが、帰国後には2、3語話せるようになり、もっと話せればよかったと少し悔やんだところである。

(しばた・やすこ／一橋大学附属図書館)